

# 「環境未来都市・下川」への疑問 ④

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

## 森づくりや加工に課題山積

### 山壊しに警鐘

「環境未来都市計画は国の『森林・林業再生プラン』を焼き直したものが目立つ。町有林は公益的な機能よりも伐採や木質バイオマスの確保が優先され、(森づくりに熱心だった)原田四郎前町長の考え方と違ってきたのではないか。国有林との提携で何をするのかも見えない」と、下川町森林組合の元職員・富岡達彦さん(49)が危惧する。

あり方も議論した。計画は、伐採量を増やし、林道の路網密度を高め、木材の生産コストを下げる施策に重点を置く。これまでの経験を踏まえ、富岡さんが警鐘を鳴らす。

### 集成材部門の行方

「そこには過剰伐採をくり返したことに對する反省がない。5年間で3倍近くに増やす)計画の伐採量だと、大きな重機を入れて材を搬出することになる。でも、20~30年後を見据えた仕事ができる技術者は一朝一夕には育ちません。長いスパンで考えないと、溪和地区の森林が強風で倒れた時と同じような結果を招く。国の路網整備を鵜呑みにすると、山が壊れてしまう」。

計画では林業・林産業の年間生産額を24億円(11年)から30億円(15年)に増やす目標を設定。路網の高密度化を重点伐採から製品の出荷

目板などの製品を作る森林組合の工場と、針葉樹を原材料に構造用の製品を作る民間の「ウッドェしもかわ」の2つで生産される。後者は森林組合も原材料を供給。

近隣の町に製材工場がなくなるなか、伐採から製品の出荷の収益で赤字を吸収し、地域産業に貢献したと思う」と振り返る。

長く同組合の役員を務めた梅坪龍雄さんも「集成材など加工部門と組合そのものが両立できるのか、岐路に立たされているのは事実」とし寄せるなか、わず

果たず義務もある。「計画は明るい未来を創るもの」と町の取り組みを評価してきた山下組合長は、「我々も計画の骨格を見せられても、中身まで分からない面がある。住民に伝える努力が必要であり、説明会などの機会を増やすべきだ」と注文をつけた。

北大雨竜地方研究林長も務めた神沼公三郎さん(北大名誉教授・林業経済学)は「研究林にも太い木は少なくなってきた。広葉樹が減った現実を踏まえ、今は保育などに投資するしかない。国・道有林が正直な森林管理の手本を示し、伐つていい森林と、しばらく伐採しないところを区分けするとい

## 町は伐採や木質バイオ確保を優先

### 現実を踏まえ、計画の見直しも必要

い。(5年間で3倍近くに増やす)計画の伐採量だと、大きな重機を入れて材を搬出することになる。でも、20~30年後を見据えた仕事ができる技術者は一朝一夕には育ちません。長いスパンで考えないと、溪和地区の森林が強風で倒れた時と同じような結果を招く。国の路網整備を鵜呑みにすると、山が壊れてしまう」。

計画では林業・林産業の年間生産額を24億円(11年)から30億円(15年)に増やす目標を設定。路網の高密度化を重点伐採から製品の出荷

目板などの製品を作る森林組合の工場と、針葉樹を原材料に構造用の製品を作る民間の「ウッドェしもかわ」の2つで生産される。後者は森林組合も原材料を供給。

近隣の町に製材工場がなくなるなか、伐採から製品の出荷の収益で赤字を吸収し、地域産業に貢献したと思う」と振り返る。

長く同組合の役員を務めた梅坪龍雄さんも「集成材など加工部門と組合そのものが両立できるのか、岐路に立たされているのは事実」とし寄せるなか、わず

果たず義務もある。「計画は明るい未来を創るもの」と町の取り組みを評価してきた山下組合長は、「我々も計画の骨格を見せられても、中身まで分からない面がある。住民に伝える努力が必要であり、説明会などの機会を増やすべきだ」と注文をつけた。

北大雨竜地方研究林長も務めた神沼公三郎さん(北大名誉教授・林業経済学)は「研究林にも太い木は少なくなってきた。広葉樹が減った現実を踏まえ、今は保育などに投資するしかない。国・道有林が正直な森林管理の手本を示し、伐つていい森林と、しばらく伐採しないところを区分けするとい

私鉄の車掌から山の仕事に転身。重機の運転などに従事し、さーくる森人類(NPO法人・森の生活の前身)の初代表を務めた。「再生プラン」をめぐる審議会の傍聴に下川と東京を往復し、町の審議会では町有林の

伐採量だと、大きな重機を入れて材を搬出することになる。でも、20~30年後を見据えた仕事ができる技術者は一朝一夕には育ちません。長いスパンで考えないと、溪和地区の森林が強風で倒れた時と同じような結果を招く。国の路網整備を鵜呑みにすると、山が壊れてしまう」。

計画では林業・林産業の年間生産額を24億円(11年)から30億円(15年)に増やす目標を設定。路網の高密度化を重点伐採から製品の出荷

目板などの製品を作る森林組合の工場と、針葉樹を原材料に構造用の製品を作る民間の「ウッドェしもかわ」の2つで生産される。後者は森林組合も原材料を供給。

近隣の町に製材工場がなくなるなか、伐採から製品の出荷の収益で赤字を吸収し、地域産業に貢献したと思う」と振り返る。

長く同組合の役員を務めた梅坪龍雄さんも「集成材など加工部門と組合そのものが両立できるのか、岐路に立たされているのは事実」とし寄せるなか、わず

果たず義務もある。「計画は明るい未来を創るもの」と町の取り組みを評価してきた山下組合長は、「我々も計画の骨格を見せられても、中身まで分からない面がある。住民に伝える努力が必要であり、説明会などの機会を増やすべきだ」と注文をつけた。

北大雨竜地方研究林長も務めた神沼公三郎さん(北大名誉教授・林業経済学)は「研究林にも太い木は少なくなってきた。広葉樹が減った現実を踏まえ、今は保育などに投資するしかない。国・道有林が正直な森林管理の手本を示し、伐つていい森林と、しばらく伐採しないところを区分けするとい



森林組合の集成材部門は赤字が続く。今後の方向づけが課題になっている